

教えの庭から

後期高齢者になつて5年。最近、若い頃のことをよく思い出すようになりました。

私は大学を卒業後も大学院に進み、物理の研究者としての道を歩み始めました。同時に、禅宗の寺の長男として、いずれは住職になることも意識していました。研究と修行、その両方をどうにか両立できないかと考えていたのです。

27歳で大学院博士課程を修了し、広島市郊外にある広島電機大学に就職、その夏に父の勧めで兵庫県西宮市にある海清寺の春見文勝老師に会いに行きました。文勝老師は、父のかつての修行仲間でした。3日間滞在中に、2度、相見することができました。「禅と念

老師からの教えを思う

出雲市斐川町・仁照寺住職 江角 弘道

仏は、どう違うのでしょうか。老師は静かに答えられませんでした。「それは私にとって、仏をどこに求めるかということだな。そんなものがわかってもしようがない



挿絵 平尾恵郷

いぞ」。2度目の相見では、厳しい言葉を頂きました。「人のことではない、自分のことだ。俺は『無』で助かっている。『南無阿弥陀仏』で助かる奴もいる。そ

そこでの虎山老師の言葉は、また違った形で私の心に刻まれました。「生命を永遠の相においてとらえることが大切である。私は、『花のいのちは短くて、苦

しきことのみ多かりき」という歌がきらいです。人間にも春夏秋冬がある。晩秋は、例えば事業などに失敗した時であろう。その次には厳しい冬が待っている。それを乗り越えないと春は来ない。人間には花の咲く時がある。さらに散りゆく時があるのは、花の一部ではないか。阿弥陀仏の呼び声が聞こえて来るのが信仰

である。私があつて経験(因縁)があるのではない。経験(因縁)があつて、私がある」

80歳を迎えた今、2人の老師の教えや、その後の娘(20歳)の突然死などの体験から、いのちについて考え、仏教は「いのちの教え」であると確信しました。また、虎山老師の話の「阿弥